

Title	日本語と中国語の文脈指示詞の研究 --談話モデル理論からのアプローチ--( Digest_要約 )
Author(s)	劉, 羈
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2014-03-24
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18367">http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18367</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2014-04-01に公開; 許諾条件により要旨は2014-04-01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

# 日本語と中国語の文脈指示詞の研究

## - 談話モデル理論からのアプローチ -

### 要約

日本語の指示詞はコ・ソ・アという三系列があり、その用法は多岐に分かれている。この三系列の形態素は単独で用いられず、指示代名詞の「これ・それ・あれ」、指示形容詞の「この・その・あの」や「こんな・そんな・あんな」、指示副詞の「こう・そう・ああ」など、様々な形で用いられている。これに対して、中国語の指示詞は「这（近称）・那（遠称）」という二項対立であり、指示代名詞の「这（个）（これ）・那（个）（それ、あれ）」、指示代名詞の「这（个）（この）・那（个）（その、あの）」、指示副詞の「这样（こう）・那样（そう、ああ）」のように、単独でも用いられる。

伝統的な研究では、指示詞の用法は現場指示と文脈指示との2つに分類されている。現場指示とは、発話現場で人やものを実際に指し示すという使い方であり、文脈指示とは発話内容の中あるいは記憶の中の要素を指すような使い方のことであるとされる。しかし、従来の研究では記憶の中の要素を指す用法も文脈指示として扱われてきたが、東郷（2000）が指摘するように、共有知識領域（記憶の中）に存在する対象を指すことができるのは、ア系に限られる。この指摘の意味するところは、「文脈指示のア」の用法の存在を否定するというものである。本研究は東郷の説を妥当なものとし、日本語の文脈指示詞はコ系・ソ系に限られるという立場をとる。

日本語と中国語の先行研究では、「文」を最大の単位とする伝統的な考え方が主流となっている。これに対して、日本語では庵（2007）が「文文法」の上位にある「テキスト文法」の観点からコ系とソ系の選択問題を扱っている。しかし、庵（2007）は現場指示と文脈指示を統一的に説明しようとせず、文脈指示は現場指示とは別の原理の「結束性（Halliday & Hasan 1976）」によって支配されると述べているが、これに対して、本研究は全く逆の観点をとる。コ系とソ系の対立と選択問題は「テキスト上で捉えられるもの」ではなく、「心的に表象されるものである」と考える。現場指示的用法と文脈指示的用法は無関係ではなく、現場指示における選択原理は文脈指示の用法にも反映されていると主張する。

Brown & Yule（1983）によると、「文」ではなく「談話」における指示行為は、話し手だけではなく、聞き手がいて初めて行われる相互的な行為である。したがって、本研究はコーパス調査をもとに、談話モデル理論（東郷2000）の観点から、聞き手とその知識状態を重

視した考察を行った。また、日本語と中国語の文脈指示詞の使い分けが談話ジャンルから強い制約を受けるということは、劉（2011）以外の研究ではあまり注目されず言及されたことはない。劉（2011）の研究結果から、ニュースではコ系指示詞が9割以上であり、会話ではソ系指示詞が約9割であることが観察された。しかし、これまでの研究では談話ジャンルへの偏りが顕著に見られる。たとえば、田窪・金水（1996）は会話の作例を中心に考察しており、庵（2007）では用例の多くは「新聞」というジャンルから採集されている。この問題を解決するため、本研究は「語りのモード」「情報伝達モード」および「対話モード」という談話モードの観点から、バランスのとれた考察を行った。

ここからは、本研究の各章の内容を次のように要約しておきたい。

第1章では、本論文の研究対象、研究方法、理論的枠組および使用するデータを報告した。

第2章では、文脈指示のコ系とソ系、「这」系と「那」系指示詞に関する先行研究を踏まえ、その功績と限界を指摘した。特に、テキストレベルで指示形容詞の「この」と「その」の選択原理を提示した庵（2007）、「这」系と「那」系の文脈指示的用法を積極的に扱った丁（2003）と楊（2010）を詳細に取り上げて批判的に検討した。

第3章では、既存の談話理論を概観した上、本研究の理論的枠組である談話モデル理論を紹介し、その基本的モデルを対立型と融合型という二つのパタンに分けた。

第4章では、談話ジャンルと談話モードについて検討する。談話の目的によって、談話ジャンルは様々な談話モードを形成しており、本研究は「語りのモード」「情報伝達モード」と「対話モード」という3つの談話モードを提示した。

第5章では、語りのモードにおける日本語と中国語の文脈指示詞を考察するため、談話の展開に沿った「導入部」「展開部」「終結部」という談話構造を提示した。

第6章、第7章、第8章では、談話モデル理論の2つのパタンである対立型と融合型を用いて、「語りのモード」、「情報伝達モード」および「対話モード」におけるコ系とソ系、「这」系と「那」系の文脈指示の使い分けについて詳しく考察を行った。

最後に、本研究で得られた研究結果は第9章でまとめられている。具体的には、語りのモードと情報伝達モードにおいては、両言語の文脈指示的用法はよく似ていることが判明した。ソと「那」は、話し手が自分のみ保有している属性情報を利用せず、聞き手との共通の言語文脈領域に登録済みの談話指示子に新たな属性情報をアップデートするために用いられる。コと「这」は、話し手が情報の占有者として談話を構成している場合、自らの共有知識領域に予め格納されたより豊かな属性情報を利用しながら、言語文脈領域に登録された談話指示子を指すときに使われる。なお、コと「这」は談話モデルの埋め込みが行われた場合にも用

いられる。

一方、日本語と中国語の「言語文脈領域から共有知識領域への転送原則」の違いによって、目の前に聞き手がいる対話モードにおいては、両言語の文脈指示詞的用法も異なる振る舞いを示していることが分かった。日本語の場合には、話し手の発話によって聞き手の言語文脈領域にコピーされた談話指示子とその属性情報は、談話セッションが終わってしかるべき時間が経過した後、共有知識領域へ転送されることになる。ただし、しかるべき時間が経過していなければ、聞き手の共有知識領域に談話指示子とその属性情報が転送されず、もちろんそれにアクセスすることもできない。したがって、聞き手は自分の言語文脈領域にコピーされた談話指示子とその属性情報をデフォルトのソで指すほかない。その一方、中国語では時間とは関係なく、聞き手の言語文脈領域に新たに登録された談話指示子とその属性情報は、直ちにその共有知識領域にも転送される。よって、聞き手はいつでもそれを利用できるため、「这」を用いることができると考えられる。

以上の研究結果から、文脈指示的用法においても、現場指示的用法の距離区分説のように、話し手は自分だけがアクセスできる情報を「近い」と見なし、コと「这」で指示するが、自分だけではなく、聞き手も対等な立場からアクセスすることができる情報を「近くも遠くもない」と見なし、ソと「那」で指すことが分かった。つまり、「コ・ソ」「这・那」の現場指示的用法と文脈指示的用法は、無関係のものではなく、その間には緩やかで統一的なつながりがあることが確認された。

ただし、日本語では、現場指示の場合、人称区分説と距離区分説の両方がともに機能するが、文脈指示の場合はそうではない。対話モードではもちろん聞き手がいるが、語りのモードと情報伝達モードでは顕在的な聞き手が存在せず、二人称領域は規定しにくいため、人称区分説と折り合わないことがある。したがって、文脈指示詞の使い分けは、基本的に距離区分説に基づいていると思われる。一方、中国語では、現場指示の場合も文脈指示の場合も、話し手は聞き手の領域をあまり意識していない。よって、「这」と「那」は人称区分説ではなく、距離区分説によって使い分けられると考えられる。